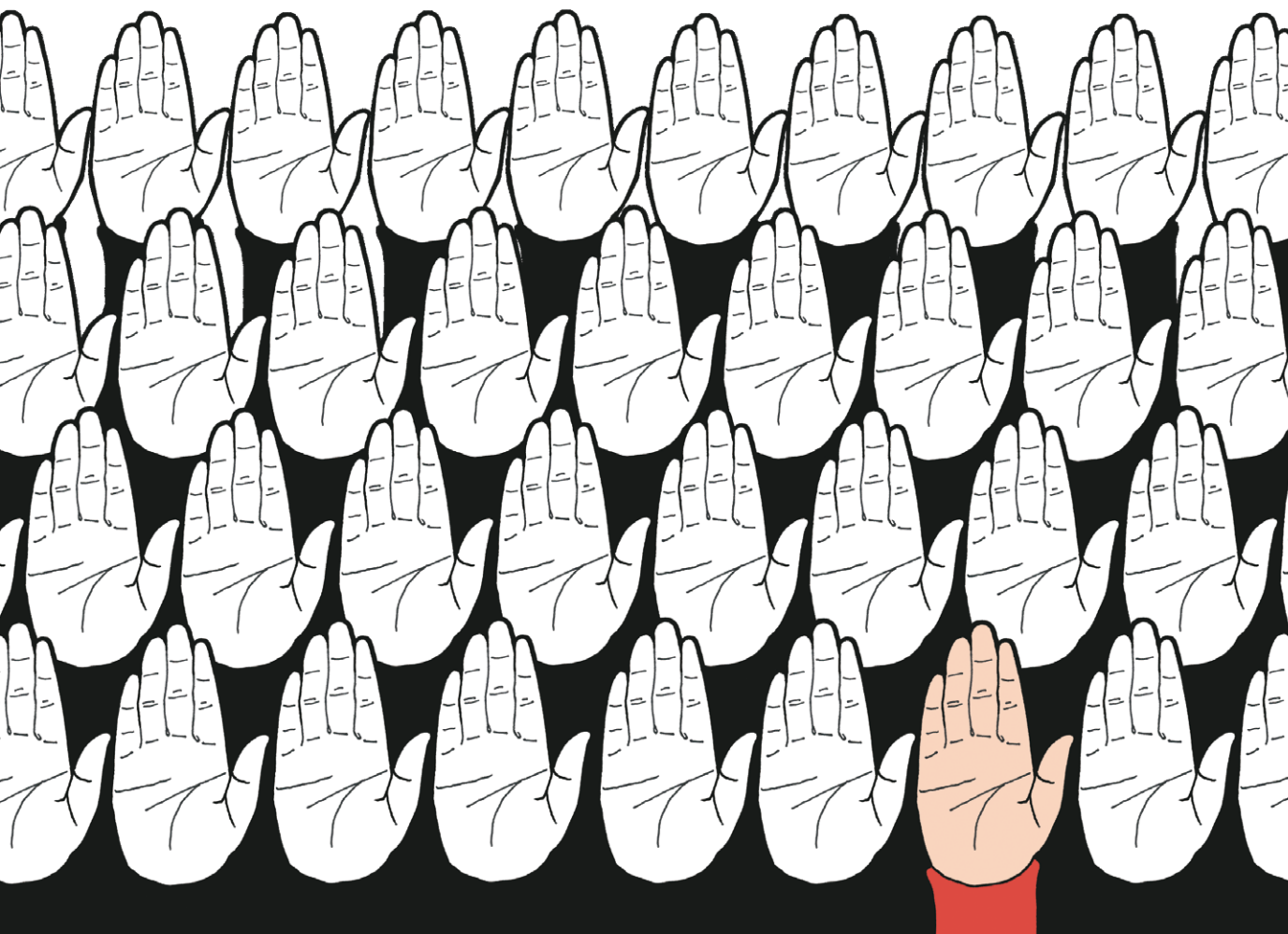


子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2017年1月 NO.195



[もくじ]

- 2～3 より良い展示を目指して…平塚知仁
- 4～5 ノトスタジオの六年間の取り組みとそこから見えてきたこと…西村和宏
- 6～7 高知城下町遺跡を掘る（一）～江戸時代の町並みと侍屋敷…浜田恵子
- 8～9 『お國と五平』上演プロジェクト 顛末記 後編
—「利賀演劇人コンクール2016」入賞までのあゆみ—…西村和洋
- 10～11 陶芸はおもしろい…広川絵麻
- 12～13 高知市文化振興事業団10月～11月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

子ども展を目指して

平塚 知仁

美術施工という仕事

私は美術の施工を仕事としています。美術施工と言ってもなかなか聞き慣れない言葉だと思いますので、簡単に仕事の内容を説明しますと、主に仕器の制作や展示壁の造作、作品の設置、その他にもアーティストと共同での美術作品の制作など、展覧会や芸術祭を開催するにあたって展示される作品の制作を技術面でサポートする事を仕事としています。

単に作品の制作や展示と言って、展示空間全体を使用したインスタレーションやパフォーマンスなど、表現や展示の方法は年々、多方向に広がりを続けており、絵を壁にかけるのであれば学芸員や美術作品の移送業者で事足りる展示作業も、より専門的な知識や経

験が問われる場面が増えて来ています。

そういった場面で防災面などの美術館の規定をクリアしつつ、学芸員と作家の思い描く理想の展示の形態を、現実の物にして行く事が、美術施工の仕事であると考えています。

この仕事を始めたきっかけは三年前の春。私は美術系の学部を卒業してすぐ、知り合いの紹介で現代美術作家のアシスタントの仕事を始めました。しかし、大学では日本画コースを専攻していたため現代美術という領域については歴史も著名なアーティストについても分からず、ましてやそのアシスタントとはどういう仕事をするのか全く分からないままその仕事を始めました。

そこでまず与えられた仕事は、

秋に開催される展覧会の作品展示会場となる古い建物の改修工事の手伝いでした。DIY程度の木工作業しかした事がなかった私にとって、大工さんの指示の下、壁を張り直したり、抜けそうな床を直したりという改修作業は未経験の事ばかりでした。しかし、建材の加工や工具の扱い方など、今の仕事をやるにあたりとても重要なスキルが身に付いたのもこの時でした。

その他にも、展示作品の設営や展覧会の運営に関わる事など、一年間アシスタントとしてさまざまな経験を積んだ結果、美術を裏から支える仕事がいきたいと思うようになりました。

演劇の裏方に憧れて

思い返すと、こういった裏方の仕事は小さい頃からの憧れの職業であったと思います。

私は一九九一年、高知県の旧西土佐村（現四万十市）に生まれました。文化活動をしていた親の影響で、子どもの頃は二、三ヶ月に一度の割合で子ども向けの演劇鑑賞会に参加していました。そこで私が何より興味を持って惹かれたのは役者ではなく裏方の仕事でした。

だっだっ広くて何も無いステージに、ものの数時間で城や森などの物語の舞台を作り上げ、そして二時間弱の舞台公演の終わりとともに、それら演劇の世界観に深みを与えていた城や森は、まるで何事もなかったかのように解体されトラックに積み込まれどこかへ運ばれて行く。それら舞台設営の裏方の仕事の手際は、幼い私にとってはまるで世界を創造できる魔法のように思えました。

いくつか見て来たなかで、最も記憶に残っている舞台はサミュエル・マルシャーク原作の「森は生

きている」という物語のオペラ版です。一月から十二月までの十二人の月の精にまつわるロシアの物語なのですが、物語の冒頭、「燃えろ、燃えろ、鮮やかに」と十二月の精達が焚火を囲んで歌い踊る場面は今でも忘れられません。

赤い光に照らされた布が送風機に煽られ、はためいているその様子が、幼い私にはどうしても本物の焚火にしか見えず、困惑すると共にその不思議な揺らめきが私を物語の世界観へと引き込んでいきました。

そのような体験を経てきた事が、今の美術の裏方とも言える美術施工の仕事に対する思いへと繋がっているのだと思います。



変わるものと変わらないもの

二〇一五年より、私はフリーランスの美術施工家として活動を始めました。この二年間で、新潟の越後妻有で開かれた「大地の芸術祭」、神奈川県箱根にある彫刻の森美術館、東京都現代美術館など、様々な御縁で日本各地の芸術祭や美術館、ギャラリーでの展覧会設営に立ち会い、多くの学芸員や作家と仕事をする事ができました。

当たり前ですが、作家の作品は制作方法から展示方法にいたるまでそれぞれ独自の手法やルールが決まっている場合が多く、一度の仕事で得る事のできた経験が、その次に生かす事ができるかと言うとそうではありません。展示する作品が変われば、前回の仕事で得た経験がなんの役にも立たないと言う事もよくあるため、常にその時々合った、作品にとって最良の展示の形態を考え続けなければなりません。しかし、そこにこそ、この仕事の面白みを感じています。そして、この仕事をしていて最も良かったと思える瞬間は、展示

もしくは作品の完成に立ち会える事です。それは、この世でまだ誰も見た事のない作品の第一鑑賞者になれるということなのです。

これから

近年、ビエンナーレやトリエンナーレ形式の芸術祭が日本各地で数多く開催されるようになりました。今まではホワイトキューブが展覧会の会場として主流でしたが、古民家や道端など個性を持った特殊な空間での展示も増加しています。



そういった特殊な空間で作品と空間の双方が調和するような展示を作り上げていく、また、ホワイトキューブであっても作品の魅力を引き立てていくような展示作りを、私は続けていきたいと思っています。

ひらつか ともひと

一九九一年 高知県四万十市(旧西土佐村) 出身

二〇一四年尾道市立大学芸術文化学部美術学科日本画コース卒業。二〇一五年から作家活動を行いつつフリーランスで美術施工の仕事始める。

(二〇一五年)

・大地の芸術祭／岩間賢の作品制作補佐

・浅井裕介展「絵の種 土の旅」／制作補佐・展示設営

・東京アートミレーティング「見えない都市を見せる」／現代芸術活動チーム目の制作補佐・展示設営

(二〇一六年)

・さいたまトリエンナーレ2016／現代芸術活動チーム目の制作補佐・展示設営

・目・Bapu／現代芸術活動チーム目の制作補佐・展示設営

ノトススタジオの六年間の 取り組みとそこから見えて きたこと

西村 和宏

四国学院大学は香川県善通寺市という人口三万人の小さな街にある大学です。その大学が、二〇一年に学長特別補佐として劇作家・演出家の平田オリザ氏を迎え、中国国初の本格的演劇コースをスタートさせました。

学長の末吉高明氏が、学生のコミュニケーション能力の向上のため、ドラマエデュケーションを取り入れようと平田オリザ氏に相談したのがきっかけです。

私は、それまで東京を中心に演出家として活動してきましたが、この演劇コースの常勤講師として着任、住まいも善通寺市に移しました。また、四国学院大学は敷地内にノトススタジオという席数八十席程度の小劇場クラスのスタジオを所有していましたので、その芸術監督にも就任しました。

このノトススタジオでは、青年団、虚構の劇団、東京デスロック、チエルフィツチュなどプロの劇団の上演、森新太郎氏や矢内原美邦氏、多田淳之介氏など第一線で活躍する演出家・振付家と学生スタッフ・キャストによるレジデンス作品『S.A.R.P. (四国学院大学アーティスト・イン・レジデンス)』、そして私たち教員と学生でクリエイションする『シアタータンク』、学生たちが実験的な作品を創作・上演する『ノトスラボ』など、様々な形でクリエイションや上演を行っています。

こうした上演の他に、年に二回、子供向け演劇とダンスのワークショップ「ノトスクール」も開催しています。これは小学生を対象にしたワークショップで、本学教員の阪本麻郁（ダンス）、仙石桂子

（即興演劇）がファシリテーターを務め、学生がアシスタントと運営に関わっています。

また昨年度からは国際交流企画にも取り組んでおり、二〇一五年は韓国とアルゼンチンから、二〇一六年はドイツからカンパニーを招致し、コンテンポラリーダンスや演劇を上演しました。

これらに加えて、瀬戸内国際芸術祭参加や、香川県の文化芸術祭への参加など、外部での公演も積極的にを行っています。

おかげさまでこれらの公演、ワークショップは地域の皆様にも大変好評で、ノトススタジオは大学内の施設にとどまらず、地域にひらかれた「劇場」として、順調に発展し、今では、四国内においてもっとも注目される劇場の一つとなりました。

高知県からも毎公演ごとに、多くの演劇ファン、演劇・ダンス関係者にご来場いただいております。

ノトススタジオを「地域の劇場」として運営していきたい、というのは当初からの私の目標でしたので、こうして県外からの観客が来てくださることが当たり前のことのように becoming 本場にありがたい限りです。

「劇場は生き物」だと言いますが、この六年、ノトススタジオを運営してきて、それを私は実感しました。演劇コースができる前、このスタジオは綺麗な箱でした。

それを、プロの劇団が来るたびに、アーティストの要望をなるべく聞き入れよりよい作品創りに貢献できるような劇場として対応してきました。また、劇場で作品のクリエイションをするたびに、学生たちと一緒に新しい劇場の使い方や運用を考え、少しずつ備品も増やし、より使いやすい劇場を目指してカスタマイズを続けてきました。

こうした積み重ねで、劇場が空間として本当によいものになってきました。劇場は管理・保存するためのものではなく、作品を創り続ける、上演し続ける空間、場であるべきだと再認識しました。そのことが劇場の存在意義であり、劇場が生きているということだと私は思います。

地域にいても大抵のものは手に入ります。専門書はアマゾンで購入できますし、おしゃれな服はZOTOWNで購入、楽天で海外の家具も購入できます。オンラインモールとネットがあれば、地域にいても大抵のものが手に

入るのです。つまり、ものゝ間に
関しては東京も地域もそれほど格
差はないのです。食に関しては、
東京より高知のほうがよっぽど美
味しい食材が安く手軽に入るでし
ょう。医療はどうでしょう？
医療も地域の病院が全国初の手術
に成功したというニュースをみる
ことは少なくありません。過疎地
や離島での格差はあるかもしれま
せんが、少なくとも県レベルでは
地域間格差はそれほどないのでは
ないでしょうか？

翻って、芸術文化はどうでしょ
うか？私は東京から、香川に越し
てきた時、観られる映画が圧倒的
に少なくなったことに愕然としま
した。観たいと思った映画が四国
ではやってないのです。せいぜい
岡山まで、という映画がたくさん
あります。では、舞台芸術はどう
でしょうか？さらに観られる作品
が少なくなります。仕方がないの
で、東京や関西など都市部に観に
行くことになるのですが、夫婦で
東京観劇に行けば、一、二本観る
だけで十万円程度かかります。と
てもじゃないですが、年に何回も
行けません。つまり、地域だと芸
術文化へのアクセスが圧倒的に悪
く、地域間格差がかなりあると言

えます。では、この文化格差はど
うすればいいのでしょうか？地域
に住んでいるから文化芸術を楽し
むことができないでも仕方がない
と諦めるしかないのでしょうか？
私はここに公共ホールの役割が

あると考えます。地域の芸術文化
の中心を担えるのは公共ホールに
しかできない、と私は考えていま
す。だからこそ、公共ホールは十
年、二十年後のその地域における
芸術文化のビジョンと劇場のミッ
ションを明確にするべきです。長
期スパンで地域の文化芸術を考え
ることは公共的な施設にしかでき
ない仕事だと私は考えます。

私はなにも鑑賞機会を保証する
ために東京から劇団を多く招致し
ろ、と言っているわけではありま
せん。限られたリソース、予算の
なかで何ができるか、将来を見据
えて必死に아가いてほしいと願っ
ているだけです。予算が潤沢であ
れば、静岡県舞台芸術センターの
ように、専門のスタッフ・俳優を
雇用し、世界的水準の作品を創っ
ていくというのも一つのあり方で
すし、地域のコミュニティ形成の
中心を担うためにワークショップ
や市民劇を実施していくというの
も一つの方法だと思えます。正解

はどこにもありません。それぞれ
の地域の状況や予算に応じてベタ
ーを押し続けるしかないのです。

そうした努力し続ける劇場が四
国内で少しでも増え、それらが繋
がり、四国内でネットワークを構
築できれば、かなり豊かなことが
できるのではないかと私は思いま
す。それぞれの劇場がクリエイシ
ョンしたものを四国内でツアーす
る、ということも可能ですし、プ
ロの劇団を数館の劇場が連携して
招致し、交通費を折半、四国内ツ
アーを実施するということのかなり
現実的な案だと思います。

劇場単体だと難しいことでも四
国という地域で見れば、可能性は
ぐっと広がると思っています。こ
れからの地域社会において、劇場
や公共ホールができることは決し
て少なくありません。劇場・演劇
・ダンスの関係者の皆様、より豊
かで暮らしやすい地域社会にする
ためにも、自分の創作環境のため
にも、それぞれの場所所でこれから
もお互い頑張りましょう。そして
機会を設けては語り合い、顔をつ
ながていきましょ。

劇団や劇場単体、市や県だけで
見るのではなく、四国を一つとし
て捉え、四国全体で芸術文化を盛

り上げていきたい、私は、そう切
に願っています。

きっと、そこから見える風景に
四国の芸術文化の、地域社会の未
来が広がっているように私は思う
のです。

にしむら かずひろ

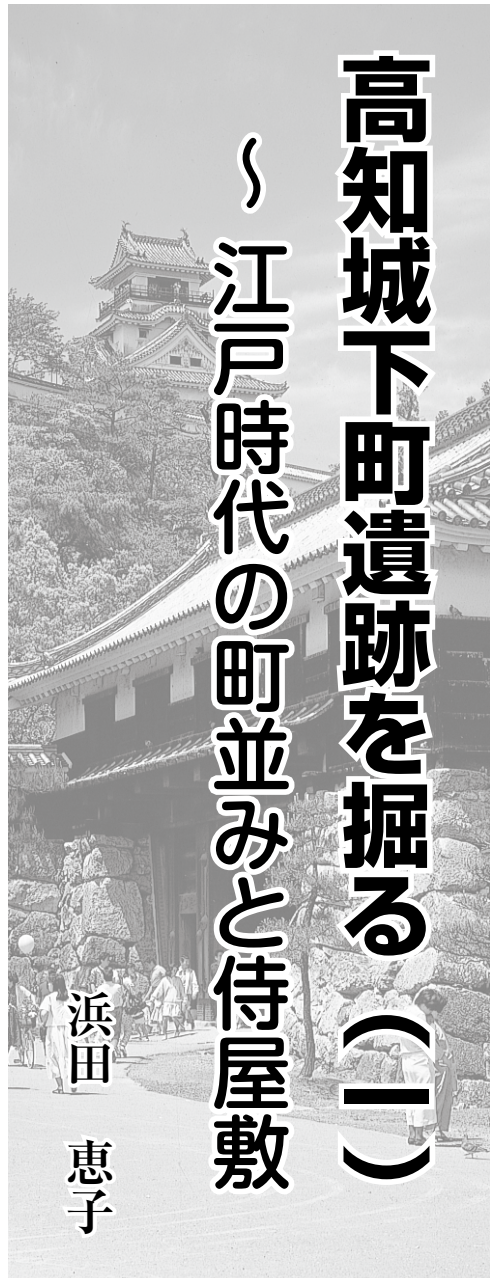
一九七三年生まれ 兵庫県出身
演出家、四国学院大学准教授、サラ
ダボール主宰、青年団演出部、ノト
スタジオ芸術監督。一九九九年よ
り劇団第三エロチカで俳優として活
動。二〇〇二年にサラダボールを立
ち上げ、以降すべての演出を手掛け
る。二〇〇五年より平田オリザ氏が
主宰する劇団青年団の演出部に所属。
二〇一一年より四国学院大学にて教
鞭を執る。これを機に活動の拠点を
香川県に移し、地域での演劇教育や
創作活動を行う。



ノトスタジオと四国学院大学
演劇コースの学生

高知城下町遺跡を掘る(一)

江戸時代の町並みと侍屋敷



浜田 恵子

江戸時代の町並み

高知市の中心市街にある本町と帯屋町は、江戸時代にできた町並みです。

本町は、東の堀詰から西の升形までを貫く本町筋（現在の電車通り）に面した侍屋敷町で、城下町が建設されたとき最初にできた町筋であったため、この町名がついたとされています。帯屋町は、本町筋に並行して西の升形まで延びる帯屋町筋に面した町筋で、町名は藩政時代初期、町の東方に大商人帯屋勘助が住んでいたことに由来するといわれています。帯屋町は西端に御城の南御門や藩主の御殿をひかえた町筋で、その後、町

屋はなくなり、家老屋敷や藩の南会所、医学館などが並んでいました。

現れた侍屋敷

平成二十七・二十八年には、高知市役所の庁舎改築に伴って、市役所と市民図書館敷地内の発掘調査が実施されました（高知市教育委員会）。ここは江戸時代に家老屋敷や藩主一族の屋敷があった所で、調査により、江戸時代前期から後期（十七～十九世紀）の侍屋敷の姿が明らかにされました。

調査区では、水道施設や井戸、建物の柱穴、屋敷境の溝、塀などの基礎の石列、ごみ穴など、さま



北から現在の電車通りを臨んでいる

ざまな施設が見つかりました。

上水道と井戸

本町の侍屋敷では、江戸時代後期（十九世紀）の水道施設とみられる、木樋と枅を検出しました。

木樋は当時の水道管で、板を組み合わせた断面が四角形のものや、丸い木を削り貫いたものがありました。類例の水道施設には竹管を使用した竹樋があり、これは高知城下町の追手筋遺跡（平成二十五年度新図書館建設に伴う発掘調査、高知県埋蔵文化財センター）で確認されています。また、枅は貯水槽としての役割のものと、水量・水質を見るもの、分水するものなどがありました。

本町遺跡で検出した木樋は、厚さ四・五cm、幅四十cmの底板に側板と蓋を組み合わせたもので、断面四角形の木樋であったと考えられます。また、枅は上部を欠損していましたが、幅五十cm程の箱形のものでした。木樋はこの枅に接合されており、これらを介して屋敷内に水を取り入れる構造であったことが分かりました。

井戸は木製の筒形の井戸枿をもつものが数箇所検出されました。江戸時代末～近代頃の打ち込み式の井戸もあり、様々な形態の井戸が確認されています。

池跡

江戸時代後期（十九世紀）にな

ると、帯屋町側に藩主一族の屋敷が構えられました。調査では、この頃の池跡が検出され、山内氏の屋敷内に池を伴う庭園が造られていたことが明らかになりました。

この池は東西二十一m、南北七・六mまで検出されていますが、調査区の外側にも広がっており、さらに広大な池であったと思われる。池の石の多くは後世の攪乱によって動いていましたが、周囲に石を巡らす様子や、北岸に配置された丘状の石組みの遺構は、追手筋遺跡の池跡とも共通しており、



土佐の池造りの地域色がうかがわれます。

屋敷境と周辺の空間

隣り合う屋敷の間には、江戸時代前期（十七世紀）から溝があり、各屋敷が溝によって区切られていました。帯屋町遺跡の家老屋敷の西端には、南北に延びる幅一・八m、深さ〇・七mの溝が掘られていました。屋敷地の西隅にあたるこの空間は、周辺に大型の穴が繰り返し掘られ、食材や壊れた道具などのごみが捨てられていました。井戸も数箇所があり、敷地の隅や裏手が、賄いやごみ処理の空間として利用されていたことがうかがえます。

十九世紀になると、藩主一族の屋敷の境界には、塀などの基礎とみられる石列が巡らされました。石列は三十五cm大の石（チャート）を組んだもので、溝の近くなど地盤が弱い所では、石の下に桐木が組まれ、基礎は堅固な構造になっていました。さらに、町境の東西溝の北壁に沿う石列は、石の崩落を防ぐために、石の前面を杭や丸太によって補強していました。丸太は径二十cmで、三・七〜三・八cmの間隔で接続されて繋

れ、接合部分はさらに直角方向から別の丸太を差し込んで、固定されていました。丸太は固定のための加工が各所に施されており、当時の基礎工事技術をみることでわかります。



町境の溝

帯屋町と本町の侍屋敷はそれぞれ道側を正面としていました。双方の屋敷の背面にあたる境界には東西に延びる溝があり、これが帯屋町と本町の町境となっていました。

溝は十七世紀（江戸時代前期）からあり、もとは幅二m深さ一m程の素堀の溝でしたが、江戸時代後期には北岸に石組みの基礎をもつ塀などの施設が設けられました。近代になると、溝は南側にも石組みが設置されて幅が狭められましたが、町境の水路として、現代まで引き継がれました。最後にこの水路が埋められたのは、昭和二十年の高知空襲の直後であり、溝の最上層は赤く焼けた瓦や熱で溶けたガラス、焼土などによって埋没していました。

町境の溝が消えた今でも、江戸時代の町並は現在の道や敷地境界に引き継がれており、城下町の面影を見ることができます。

はまだ けいこ

高知市教育委員会 民権・文化財課

『お国と五平』上演プロダクション

顛末記 後編

「利賀演劇人コンクール2016」入賞までのあゆみ

西村 和洋

やがて東京から鈴木みのりが帰高し、稽古が始まった。鈴木は普段の書きを生業にしている。言葉に対するこだわり方が半端でなく、テキストの解釈に異を唱え、細部にまで及ぶ。圧倒されながらも藤岡武洋は触発され、イメージを広げていく。対するはとてつもなく大きな原っぱである。その空間に対してどのような造形をするか？俳優の身体を抽象化しながらも明瞭なリアリティを持たせ、説得力のある演技ができるか？台詞の語りと身体感覚は不可分である。ともかく奇を衒ったトリッキーなことはしない。「丁寧」に、丁寧に戯曲を解釈し世界を構築していくこと」を目指そうと取り組んだ。

利賀村に発つ前日、高知県立美術館でプレ上演を行う。美術館の藤田館長は「ヘッダ・ガブラー」や『誤解』で共に過ごした言わば

盟友。かつての事業を継承するプロジェクトであることを趣旨として、美術館も共催してくれることになった。開演直前の激しい雷雨によって、野外から急遽美術館ホールに切り替えたが、昼間ホール内で何度か通し稽古をしていたことで、何とか対応出来た。舞台のハネた後のお客さんの拍手がとても熱い。これなら利賀でイケるのではないか？手応えを感じ、翌日私たちは利賀村に立派した。

利賀村に到着したのは二十一時になっていた。本来ならば上演二組を観劇するはずだったが間に合わず、審査会から会場に足を踏み入れた。審査員は石川直樹氏（写真家）、相馬千秋氏（アートプロデューサー、芸術公社代表理事）、葛森皓祐氏（俳優・SCOT所属）、平田オリザ氏（舞台芸術財団演劇人会議理事長・青年団主宰・こま

ばアゴラ劇場芸術総監督・劇作家・演出家）、宮城聰氏（演出家・SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督）とそうそうたる顔ぶれである。平田氏が進行役になって審査会が始まる。「何ひとつ良いところがない……」。厳しい言葉に、上演を終えた団体は深く首をうなだれる。無自覚な作品づくりがそういう審査の言葉を引き出したのだろうか、次は自分たちがその場にさらされるかと思うと皆心穏やかではなかった。

翌日は舞台の仕込みの開始。私たちはスタッフを含めて六名。事務局スタッフからは「リフトシアターでの上演なのに過去最少の座組だ」と呆れられ、今回の応募数が、三十団体あったことや、うち八団体が上演審査に進めたと初めて聞いた。何とか夕方までに仕込みを終え、夜は明かりづくり。誰

もがタフに動き続け、演出もほとんど修正が入る。当初の予定とはまったく違う位置に舞台を設定する。野外ならではの思い切った変更は面白い。翌日、事務局スタッフを観客に迎えてのゲネプロ。更に修正し、作品は成長していく。

上演当日。この日は何をしていたかほとんど思い出せない。ただ舞台で生きることだけに集中した。カーテンコールが終わると審査員の葛森氏が舞台監督のところまで「良かったぞ！」と駆け寄ってきてくれた。あの名優葛森氏をして良かったと褒めて貰えるとはもうそれだけで十分。審査会には藤岡と鈴木みのり、残りは会場の片付け。片付けをしていると審査会を終えた藤岡がホッとした表情を浮かべて「つつこまれたのは、まあ想定内の範囲！」と明るかった。

指摘を受けたのは曖昧になった演出部分。俳優の身体の制御の在り方についても平田氏からアドバイスがあったらしい。私たちはともかく奇を衒わず、丁寧に戯曲に向かい合ってきたのだが、石川氏や相馬氏からは「何かもつと展開があるのかと思ったら何にもなかった」「戯曲に書かれたまんまだ」と演出家のコンペにしては意

外性に欠ける作品づくりに何か物足りないものを感じたらしい。けれども宮城氏は「谷崎の書いたお國の台詞を関西イントネーションで語ったのは良かった。きつと谷崎もあんなイントネーションを思いついて書いてたんだろう」とコメントしたという。これは鈴木みのりのアイデアだった。そして鈴木は宮城氏から「これからも演劇を続けなさい」と言葉を掛けられたと、嬉しそうに語る。私たちにとても十分満足できる審査講評を受けることが出来た。

高知県立美術館での取り組みからもうすでに十年。あの頃共に過ごした仲間とは、私や藤岡は若干考えが異なり、ただ朴訥に舞台芸術に何ができるかと考え、演劇に取り組んできたように思う。当時中島諒人氏や鈴木忠志氏らが多大な支援をしてくれたことをどのようにに継承し、発展させていくか。それは個人としての課題でもあり、地域の芸術環境における課題でもある。

地方で一人の演出家を育てるのに何と時間の掛かることか。藤岡はエントリーシートに「ゼロ年代世代の作品に特徴的なポストドラマのアイデアの集積を、文化芸術

環境に恵まれない地方で活動する演劇人が享受し、そこから考えを深めることは極めて難しい」と記した。地方での芸術活動は、優れた才能を目の当たりにしながら自らの作品づくりを進められないため、インスパイアされる機会もひどく制限される。そのことを憂え続けた十年だったのかも知れない。私にしてみれば地方での舞台芸術活動から現代演劇の文脈に爪痕を残すことは出来ないものかと考え続けた十年だったように思う。かつて「弘前劇場」の長谷川孝治氏が、二〇〇四年の高知県立美術館での「賢治幻想 電信柱の歌」公演の折に「郷土の演劇史に名を連ねることは出来たでしょ？ だから次は日本の演劇史に名を連ねられるようになることだよ。そして出来れば世界の演劇史にも」と励ましてくれたことを思い出す。

かくして「俳優三名の演技を含む作品の一体感」が評価され、「利賀演劇人コンクール2016」で全体の三位にあたる「奨励賞」を受賞できた。これまで私も藤岡も仕事を持ちながら芸術活動に邁進することを「一領具足の精神で頑張るしかない」と言い続けてきた。どんなに困難であろうとも心意気が

大切だ。地元紙には「アマ演出家・藤岡」と表記されたけれども、藤岡武洋は立派なプロの演出家なのだ。それを生業にして飯を食べられる状態であることだけが決してプロだとは限らない。要は精神の在り方と本質を見抜く力があるかどうかだ。利賀から帰って、藤岡は「自分が今ここにいられるのは、海外のことも含めて、十年前に多くの優れた環境に身を置かせて貰えた経験のお陰だ」と言った。「今、前向きに取り組んでいる高知の若手にも、そうした機会があればぜひぶん違うだろうに。僕は高知のこれから十年先がどうなっていくかしっかりと見ていたい」と続けた。

九月二十五日に大豊町八畝で『お國と五平』の最後の上演を終え、ひとまずこれで「『お國と五平』上演プロジェクト」の座組もすべて終了した。既に「シアターTACOGURA」は地域の芸術拠点で活動する団体として、下知地区の防災等のまちづくりに貢献しようとしている。私と共に出演した山田憲人も、同じくまちづくりに貢献できるような芸術活動を行うのが当面の思いだ。何故なら同じ趣味を持った仲間で閉じられてしまいがちな環境を突破するために

は、芸術に内在する力を使って、芸術に興味関心のない人々と協働し、創造的に課題解決にあたる。ところが今は大事だろうと考えるからだ。おそらくそれはソーシャル・キャピタルの増大にも繋がるだろうし、まちのイノベーションにも貢献できるだろう。もちろんまちづくりが本分ではなく芸術ありきであることに違いはない。そのうえで芸術がまちづくりにできることを証明して見せたいと思う。

にしむら かずひろ

演出家・「おさらい会」主宰
舞台芸術財団演劇人会議員、高知市文化振興審議会委員、高知演劇ネットワーク・演劇初代代表（二〇〇一年～二〇〇九年）

陶芸はおもしろい

広川 絵麻

がどうしても現れます。

私は自然や動物が大好きです。

また、子供の頃から、沢山の小説や音楽、漫画、映画に助けられ生きてこれました。

友人は、深く狭く恵まれました。遠く離れた今も、美術を続ける友人や先輩に刺激を受けています。

陶芸ももちろん、絵画も文学もデザインも、日々の暮らしを豊かに出来る、楽しく愉快な魔法の技術だと思っています。こんな素敵な事が何千年も続いているなんて、感激です。

ジャンルも年代も違う、私が生まれる前からあったものの、これから出会うもの、それらの全てが、私を作る栄養に、私を作る元氣になってくれるでしょう…。

そんな、「私自身」が器に現れます。強いところも、弱いところも、怖いくらいに！

その時折々のきれいや美しいという感動を大事にしたい。暗い気持ちや憂鬱なものも大切にしたい。自分の感覚を大切に、陶芸という私の好きな穴を深く狭く、しつこくしつと掘り続けられたら、内

たった一人で出来ることが、私はとても気に入っています。

日本には、とても豊かな自然があります。山があり、おいしいお野菜があります。海があり、お魚も獲れます。その中で育まれた食文化があり、沢山の窯業地も生まれ、様々な種類の器が国内各地で沢山作られています。私も、陶芸家として器を作っています。

器を作るということは、大変地味な作業です。まず、土を作る。そして、土を練る。ろくろを挽き、素焼き、施釉をして、千二百三十度前後の窯の中で焼成します。この工程のどこを間違っても、器にはなりません。最終的には窯に委ねるわけですが、一から十まで、

陶芸を始めたきっかけは、十九歳のときに沖縄県立芸術大学に入学したことです。遠く離れた美しい海の沖縄への憧れと、手に技術がつくかもしれないという安易な気持ちで入学しました。ただ、何も分からない中で、美術や文学について話せる友達が欲しいと、単純ながら、しかし切実な思いを一番強く抱いていました。

「手に技術」といいながら、入学後、自分が誰よりも不器用だということを、身をもって知りまし

た。才能の有無も思い知らされました。誰よりも多く努力しても人並みにならないくらいでした。

しかし、だからこそ道が続いたのだと思います。三十七歳の今も右往左往していますが、陶芸は非常に難しく、とても楽しいのです。

技術だけがあり、形になっても、心は有らず、魅力にならない。心があっても、基本の技術が無いと、思いの形にならない。とっても奥深い作業だと思っています。それはきつと、どんな職業・生き方にも通じることだと思っています。

人の手が作るものは、「自分」

にこもっている私の中にある、見えない何かを見つけられるんじゃないか、そんな私の欠片が、私の全てが器になるのです。

そして、同時に、使って下さる人にどう受け止めてもらえるかということも大切にしています。器を作る事は、一見孤独な作業の様に見えます。けれど、

その先に使ってくれる誰かがいます。使ってもらうということとを大切にしながら作ることも、私の仕事の一片だと思えます。

その誰かを思い浮かべて、作った器を介しておしゃべりしている、そんな気持ちになります。

器は、料理を盛る、お花を生けるといった用途という制約があります。穴が開いていたら、お水が汲めないように。けれ



ど、その中に自由に遊べる空間がある。その様に私は捉えています。丈夫なもの、長く使い続ける事の出来るものが良いと思います。しかし、器はお料理が盛られて「完成」です。お料理が映え、何故だかおいしく見えるものこそ、私は作りたいと思います。

そして、毎日同じ工程・同じ器を作っても日々変わっていったら、淡々と新鮮な気持ちで器を作れたら、と切に思います。

昔々、陶芸の職人さんが日本に渡って来て、その文化が広まって以来ずっと、沢山の人が引き継いで試行錯誤を重ねています。

地震があったり、原発があったり、出産したり、夫婦喧嘩したり、笑ったり泣いたりの中で。

そうしてできた器は、死んでも残ります。最初はそれが何とも気持ち悪かったのですが、続ける内にそれも愉快だなと感じたりしています。

いつの間にか何となく始めた陶芸が私の生活の一部となり、体を元気にしてくれています。好きということが、一番大事かもしれない。インドアで人見知りな私だけれど、陶芸よ、ありがとう。

いつか誰かの水屋にそっと忍び込んで、その人の暮らしやご飯の時間に染み込んでいきたいな...と思います。

.....
二〇一七年一月十四日〜二十一日は、かるぽーとでグループ展が行われます。窯元で職人として働かれていた方、教室をされている方、独特の技法でアクセサリを作られる方など。先輩や、私より随分若い方々と器を通して出会う事を嬉しく有難く思っています。楽しんで真剣に作りますので、もしお時間ありましたら是非見て下さい。

ひろかわ えま

一九七九年 高知県高知市生まれ
陶芸家。二〇〇一年沖縄県立芸術大学美術工芸学科陶芸コース卒業、
二〇〇三年多治見市陶磁器意匠研究所卒業。

10～11月の事業から



「演出家だらけの青木さん家の奥さん」

舞台美術はビールケースのみ。照明は地明かりのみ。音響は生ギターのみ。脚本は最低限の設定のみ。そこにあるのは俳優の肉体のみ。劇のほぼ全てをアドリブで駆け抜ける、即興演劇の名作「青木さん家の奥さん」を、現代演劇界を牽引する演出家を俳優に据え暴れさせる、前代未聞の舞台「演

出家だらけの青木さん家の奥さん」高知公演は、果たして大盛況で幕を閉じました。

終演後、お客様には「本当に全部アドリブだとは！」と驚きの声をいただきました。中でも、全く稽古も段取りの確認もせず、何をするか、作・演出の内藤氏以外誰も知らないまま本番を迎えた場面がありました。その「完全即興」の場面、舞台上は極限

の緊張と集中力で満たされ、客席にまでそのひりつく空気が伝播し、面白いのに息苦しく、でも目を離さずにはいられないもので、この作品、この出演者たちでしか味わえない特異な空間が生まれていました。

そうして積み上げられた劇空間の中で、最後、舞台を締めるに相応しいたった一言を叫ぶとき、きつと目撃したすべての人が、その一言を想像したでしょう。

舞台上で繰り広げられる、その瞬間に本気で捻り出す言葉の数々、そうして生み出される本作品は、生きた人間が生きた人間に届ける演劇の魅力を存分に感じさせてくれました。

二〇一六年十月二十二日（土）、二十三日（日）

高知市文化プラザかるぽーと小ホール

（入場者数・百七十二名）

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付

会費 1年間3,000円（4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで）

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

伝統芸能の夕べ 特別公演

十一月三十日・かるぽーと大ホールにおいて、「伝統芸能の夕べ 特別公演」を開催しました。

出演は、市川染五郎、松本金太郎、尾上右近、中村鷹之資、茂山逸平、尾上菊之丞の六名。一部は、日本舞踊の菊之丞さんと狂言師の逸平さんが本公演のために創り上げたオリジナル「三番叟」。二部は、染五郎さんと若手売り出し中の歌舞伎役者・右近さんがみせる夢幻の世界「二人枕久」。そして三部は、本公演の目玉となる親子共演（染五郎さんと金太郎さん）に右近さん



と鷹之資さんが華を添える「連獅子」です。そのリハーサル中、染五郎さんが身ぶり手ぶりを交え、金太郎さんに舞い方を教える姿がありました。そこには、師匠としての厳しさよりも、親としてのやさしさが見え、染五郎さんの性格がにじみ出ているようでした。

親獅子・仔獅子を演じるのは初めてというお二人、歌舞伎という芸の道を生き、親子でもあり師弟でもあるという姿が、演じる獅子にダブリ多くの人を惹きつけました。染五郎さんが、父・松本幸四郎さんと初めて連獅子を演じたのが十二歳の時、金太郎さんはそれよりも一年早く十一歳で演じました。連獅子の最後に親子で首を振り乱れるシーン毛振りでは、染五郎さんに負けないうぐらい豪快に、且つ鮮やかに、最後まで父親に食らいついていく様は、非常に感慨深いものがありました。

全三部で二時間半という公演でしたが、その時間の長さを感じさせないほどの充実ぶりで、終演後は、歌舞伎公演では珍しいスタンディングオベーションが起きました。帰路に着く人々は皆、本公演に対する好評を口にし、後日レポート用紙三枚分の感想文を書いてくれた方もいらつしました。アンケートからも、本公演を高知で観られたことに対する好評価を大変多くの方にいただきました。

〈入場者数・八百五十名〉

高知市文化振興事業団 出版物のご案内



高知の文化を考える

高知の文化を考える会 編

—すべての人びとに楽しいという気持ちを起こさせるような、そんな高知をつくっていききたい。

文化について多面から検討し、豊かで個性的な市民主体の高知の文化をどうつくり発展させていくかを、市民の立場で考える。(平成三年刊)

価格 1,258 円 (本体価格 1,165 円 + 消費税)

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち
高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071へ



高知を撮る

第32回写真コンテスト入賞作品

草競馬

(昭和35年3月 旧長者村星ヶ窪)

畠山 正則

二〇一六年公開のデイズニー映画「ジャングル・ブック」は子どもにも大人にも好評だったと聞く。私が「読書の世界」に開眼したのは、この物語によってである。小学二年生のころ、母が買い与えてくれた、児童向けの「ジャングルブック」(キプリング)を、夢中になって読みふけた。

オオカミに育てられた少年——オオカミ少年・モーグリ

の物語である。幼児期に心に刷り込まれる「赤ずきんちゃん」の物語。その中でオオカミは、おばあさんでも、子どもでも頭から食べてしまう化け物のようないメージで描かれている。

「オオカミと七匹の子ヤギ」に出て来るオオカミも、「三匹の子ブタ」のオオカミも、やはり恐ろしい。

ところが「ジャングル・ブック」では、人食いドラに追われた人間の赤んぼうを、オオカミが保護するのである。トラを追ひ払い、赤ん坊を愛情深く育ててゆく。赤ん坊は、オオカミの一族からジャ

ジャングル・ブック



風俗歳時記

ングルの掟」を学びながら、たくましく成長してゆく。

このストーリーに引き込まれた。恐ろしいオオカミを味方にする、最強の用心棒になる! という革命的な発見が、子どもの心を魅了した。

オオカミはこわくない。オオカミは味方にすれば良いのだ。——この「価値転換」は、読書が与えてくれた「恩寵」

だった。大人から聞かされる「おとぎ話」にはないリアルティがあった。自分がモーグリになつて密林を駆けまわる白昼夢に陶醉しながら、「読書の世界」の虜になつていった。

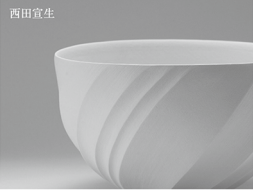
話は飛ぶが、「竜馬がゆく」(司馬遼太郎)の中に、

竜馬が黒船を見て独白する場面がある。「あの船、一隻でもよい。おれのものにできぬものか。——一隻で大名じゃ」——こわい黒

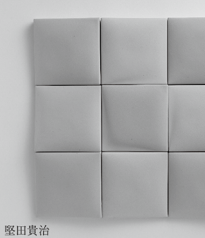
船を「我がもの」にしたいというロマン。これは、「オオカミを味方につければ、最強の用心棒になる!」という発想とどこか似ている。男の子の夢には、こういう「型」があるのかもしれない。(本の虫)



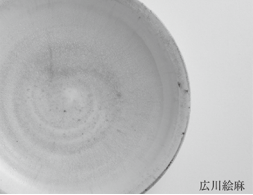
森田浩路



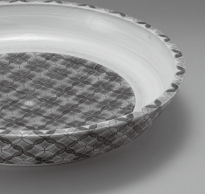
西田宜生



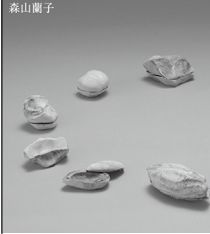
堅田貴治



久川 創



広川 稔



森山 蘭子

WORKS
それぞれの仕事
～高知県若手陶芸家の作品展～

若手美術家支援事業の一環として取り組む企画展。
今回は、土・造形・焼・自分の志向にこだわりながらも互いに切磋琢磨し、作陶を続けている若手陶芸家の合同作品展を開催します。

【日 時】 2017年1月14日(土)～1月22日(日) 10:00～18:00
※16日(月)休館、最終日は16:00まで。

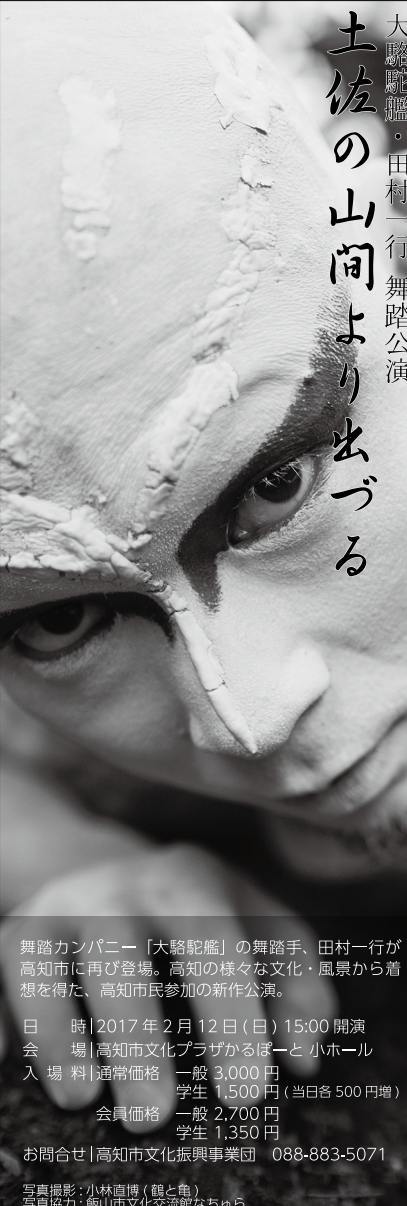
【会 場】 高知市文化プラザかるぽーと 7階市民ギャラリー第1展示室

【入 場 料】 無料

【お問合せ】 高知市文化振興事業団 088-883-5071

大駱駝艦・田村一行 舞踏公演

土佐の山間より出づる



舞踏カンパニー「大駱駝艦」の舞踏手、田村一行が高知市に再び登場。高知の様々な文化・風景から着想を得た、高知市民参加の新作公演。

日 時|2017年2月12日(日) 15:00 開演
会 場|高知市文化プラザかるぽーと 小ホール
入 場 料|通常価格 一般 3,000 円
学生 1,500 円(当日各 500 円増)
会員価格 一般 2,700 円
学生 1,350 円
お問合せ|高知市文化振興事業団 088-883-5071

写真撮影: 小林直博(鰐と亀)
写真協力: 飯山市文化交流館なちゅら

風 伯

木が優しい

これまでどれくらい引越したか、古稀を過ぎるとすぐ思い出せるだけで二十回は下らない。三十回くらいは移住しているに違いない。そのたびに近所さんや通勤コースの変化など、引越しの回数分の新たな風景を味わってきた。

ごく最近、マンションから木造の家に移った。コンクリートの建物と引越した。コンクリートの建物は、これまでどれくらい引越したか、古稀を過ぎるとすぐ思い出せるだけで二十回は下らない。三十回くらいは移住しているに違いない。そのたびに近所さんや通勤コースの変化など、引越しの回数分の新たな風景を味わってきた。

木と紙の家では、これまで若かったせいかあまり感じなかった違いに気づいた。歳と共に敏感になったのではなく、歳と共に環境の影響を受けやすくなるほど、身体が弱ってきているのだと思う。

木造住宅に比べマンションは便利で煩わしくない快適な部分も多い。ただコンクリート住宅が決定的に木造住宅

に敵わないのは、人間の身体に優しいということである。感覚的なことだが木は冬でも陽の光をため込んでいるようにだし、人が住むその体温さえ木は感じているように思う。

そんなことを何年も前に研究した人がいて、「マウスを用いた飼育実験で、木、鉄、コンクリート製の三種の箱でのマウスの子どもの生存率が、木造では約九〇%、鉄製では約五〇%、コンクリート造りでは一〇%弱であった」というもの。

ところが、コンクリート造りであっても「床に板を用いれば、生存率は木造と同等」という結果もあり、必ずしもコンクリートが悪いわけではなく、内装に木材をしっかりと使うことで、コンクリートの影響は少なくなるといえる。それは木が人間の身体に優しい証でもある。私の衰弱した肉体を引き合いに出さなくても、木造でなくても、身の回りを木と紙で覆えば、人の身体には優しくなるのだろう。

(霖)

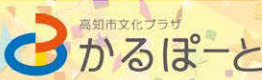
今号の表紙

「人手が足りない」

松島 利華

逆に余っているのかもしれませんが。私の将来はどちらになるのでしょうか。手はクラスメイトから借りました。ありがとう。

(まつしま りか/
国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)



高知市文化プラザ
かるぽーと

魔女の子どもフィフィが卵博士から預かった7つの卵。
きれいな卵に大喜びのフィフィたちですが、6つの卵はそれぞれのお母さん
に取り返されてしまい、たった1つ残った卵はネコの頭にくっついて取れな
くなってしまいます。
ネコは困る、卵博士は怒る、卵はだんだん大きくなる…
実はこの卵、「見たものそのものになるという、1000年に1度しか生まれ
ない幻の卵」だったのです。
フィフィはこの卵をお母さんに返そうと、お母さん探しにでかけます。
卵は無事にお母さんの元へ帰れるか？

Who Steals the Egg?

卵をとるのは だあれ？

日時:2017年1月15日(日)
13:30 開場 14:00 開演
会場:高知市文化プラザかるぽーと 大ホール
(〒780-8529 高知市九反田 2-1)
料金:全席自由 1,500円 (未就学児・膝上無料)
※1階席から順にご入場いただきます。ご了承ください。

【チケット取扱い】
かるぽーとミュージアムショップ 088-883-5052
高新プレイガイド 088-825-4335
高知大丸プレイガイド 088-825-2191
高知県民文化ホール 088-824-5321
高知県立美術館ミュージアムショップ 088-866-8118
ローソンチケット (Lコード 62064)

【お問い合わせ】公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071
<http://www.bunkaplaza.or.jp>

【主催】公益財団法人高知市文化振興事業団



45th Anniversary
K I C
SINCE 1971